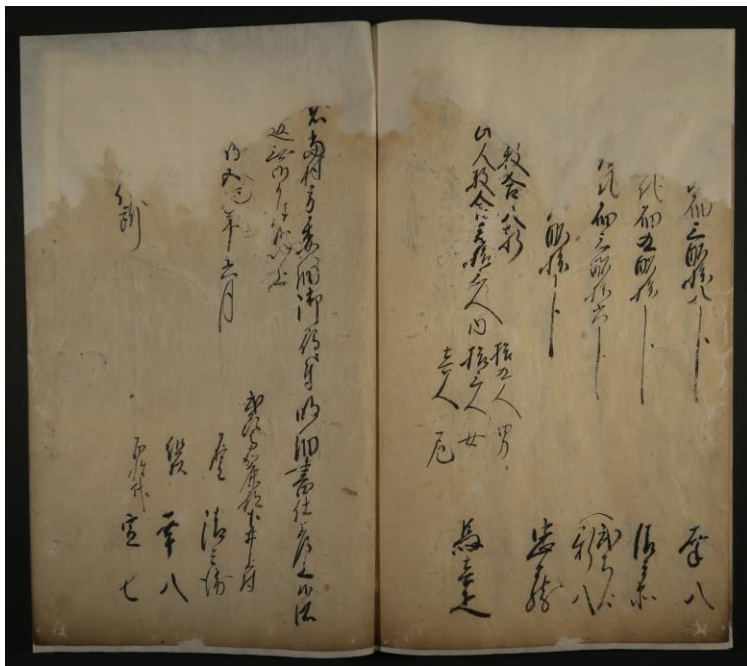


## 市域で最も小さな村-武蔵国高麗郡下井上村-

尾崎 泰弘

飯能市域には、江戸時代に 60 近い村がありました。村には名主や組頭などの村役人がいて、ある程度の自治が認められ運営されていました。このうち下井上村は大字井上にある興徳寺西側付近で、明治 2(1869)年には 10 軒 30 人が住んでいました。明治 9 年頃で現在の飯能市域にあった 1 つの村の平均人口が 325.3 人、東吾野地区で見ても 306.2 人なので、いかに小さかったかがわかります。



天明五年武州高麗郡下井上村明細書上帳(部分)

今回展示した天明 5(1785)年の下井上村の概要を記した「明細書上帳」などから、その姿をのぞいてみましょう。上井上村に囲まれる形で孤島のように存在したこの村は、東西 4 丁(440mほど)、南北 6 丁(650mほど)の大きさでした。山がちな村なので、耕地は 95%が畑や切替畑(焼畑)で、田はわずかに 4.5%に過ぎませんでした。村の男たちは耕作の間に薪を割り、炭を焼き、山仕事をし、女たちは農業の間に絹や木綿を少しずつ織って暮らしていました。

江戸時代を通じて、記録が残るなかで多い時でも 47 人(享保 19 年村明細帳)しか人がいなかったこの村が独立していたのは何故でしょうか。下井上村と上井上

村を比較してみると、田は 3 分の 1 が下井上村にあり、かつ検地の際、日当たりや土質など耕地の状況から生産力が高いと認められた上田や中田は下井上村にしかありません。田畑・屋敷の面積で上井上村の 1/5 しかないことを考えるとやや特異な感じがします。

慶長 2(1597)年の下我野郷御地詰帳(検地帳)には、中世以来多くの土地を所持し、35 人もの分付百姓(下人や従属した農民)を抱えていた大炊助という百姓が記載されています。大炊助は支配下にある農民の労働力や小作による土地経営を行っていた土豪的な存在であり、その所持する田や畑は、生産力の高い優良な耕地が多かったことがわかっています。地域ではその大炊助の屋敷が興徳寺の西側にあり、そのため 1 つの村として独立させたと伝えられています。

大炊助家はその後勢力が衰え、下井上村が上井上村と合併したのは明治 6(1873)年のことでした。

### 【参考文献】

東吾野郷土研究会『東吾野郷土誌』 昭和 45(1970)年 8 月

飯能市史編集委員会『飯能市史』資料編Ⅷ 近世文書 飯能市 昭和 59(1984)年 1 月

加藤 衛拓『近世山村史の研究 -江戸地廻り山村の成立と展開-』(第 3 章) 吉川弘文館 平成 19(2007)年 2 月